



「外」との 実りある対話を 行うために

比較文化史家
——平川祐弘氏に聞く

外来文明の強烈な影響下に発展してきた日本は、文明の出会いと衝突、融合と創造を繰り返してきた。グローバル化が進む今、我々はどのように「外」との実りある対話を行えばよいだろうか。古今東西の文化に通じ、日本と「外」の関わりを多角的に研究してきた比較文化史の泰斗・平川祐弘氏に、ご自身の異文化体験を交え、お話しいただいた。

戦時下の 英語体験から 戦後のヨーロッパ 留学まで

日本という国は、昔から波はあるが「外」からのものを取り入れてやってきました。

私は、比較文化史の研究を通してそのことを論じてきました。そこに至る経緯を改めて考えてみますと、自身の幼い頃からの勉学や経験から、その伏線はしかれていたように思います。

昭和6（1931）年、ちょうど満州事変が勃発した年に生まれた

いうちから習わせようと思ったのでしょう。ですが、当時の日本は西洋を煽るアジア主義の主張が強く、英語を習うなど、私は何か悪いことをしているような気がして、小学校のクラスメートにも誰にもそのことは言えませんでした。その一方で英語は大事だということは強く感じていました。

昭和15（1940）年の夏、房総半島に避暑に出かけたときのことですが、その汽車の中で父と私が英語を話してしまい、向かいの人から「どこの中学ですか」と話しかけられました。当時小学3年生が英語など習うはずもないので中学生と思ひ込んで聞かれたのだと思いますが、父は、本当のことがばれたら大変だと思い、とっさに「滝野川中学です」とありもしない中学の名を言って誤魔化しました。世の中はそういう時代でした。

その後、私は中学で英才教育特別科学組という特別クラスに選ばれました。これがよかった。「科学が劣っているから日本が劣勢なのだ」という考えから、古文や漢文、歴史は教えず、数学、物理、化学、英語をもっぱら学ばせる15人のクラスです。父も兄も理系ということもあり大変嬉しかったことを覚えています。ところが戦争末期で疎開しなければならず、金沢の第四高等学校の寮に入りました。ですが、そんな時代でも英語はきちんと教えられており、たとえば、Isoroku Yamamoto is the greatest admiral that the world has ever seenから形容詞の最上級と動詞の現在完了を学び、ベンジャミン・フランクリンが稲妻から電気をみつけたことなども英語の教科書からきちんと知ることができました。

戦時中の日本の英語教育について、よく「英語を教えなかった」な



Hirakawa Sukehiro

比較文化史家。1931年生まれ。東京大学名誉教授。フランス・イタリア・ドイツに留学し、北米・中国・台湾などで教壇に立つ。主な著書に『竹山道雄と昭和の時代』『和魂洋才の系譜』、翻訳書に『ダンテ神曲』『心 小泉八雲コレクション』など。現在、『平川祐弘決定版著作集』全34巻が刊行中。

どとも言われますが、それは戦後にできた神話です。私自身の経験以外にも、昭和19年には、研究社から『新英和大辞典』が2万8000部出ている。その数字をみても英語を勉強していたのは明らかです。当時は教員組合などというものもなく、現代のように瑣末なことに余計なエネルギーを取られることもないため、先生も教えることに一生懸命情熱を傾けることができたのだと思います。

ちなみに、英語の授業で最初に教わったのはI am a Nipponese. (ニッポニーズ)。戦後には戦後の言葉狩りがいくつもあり、たとえばシナとは言つてはいけないような雰囲気がありますが、それと同じで当時は蔑称である「Jap」を連想させる「Japaneseを使うな」ということが言われたのです。ですが、私の中学の先生は、そんな時流に抗して最初からNipponeseをJapaneseに直して教えてくれました。子ども心に「この先生は偉い人だな」と思ったことを覚えています。

英語のみならず、「戦時中は言論の自由がなかった」などとも言われますが、それほどのこともありません。かえって戦後のほうが、表面的に「開国」と言っているが、外国への渡航さえできず、鎖国しているのと同じようなものでした。それで逆に「外国のことを知りたい」という気持ちだけが、私のなかに猛烈に湧き起こったのだと思います。

旧制の高一に入学しましたが、1年後には学制改革で旧制高校が廃止されたため新制大学を受け直すことになりました。そこでドイツ語既修フランス語未修のクラスに入りました。東大教養学部1期生となり、2年生のときに、より学際的な教養学科ができたので、そこでフランス語と英語もよく勉強しました。

その頃の私は、夏目漱石と同じように「外国文学を、外国人と同じ価値観で判断する必要はなく、自己本位でやればいい」という考えでした。英国文学を研究して小英国人みたいな学者になってもしかたがないという気持ちが一番強かった。当初から、英文科や仏文科というナショナルな単位で括られた学問のスタイルはおかしいと感じていたので、教養学科ができたことは私にとっては本当にありがたいことでした。中で分裂した国家は駄目になる。同じように各学問に分化した精神は混乱し弱体化するということです。

学部卒業後、ちょうど創設されたばかりの東大大学院比較文学比較文化課程に入ります。ところが、先輩がいらないからどんな論文を書けばいいかも分からない。大学院よりも教養学科の水準が高かったからそのぶん、大学院がつまらなく感じてしまいました。そこで、フランス大使館の商務部で週4日働き始めます。このときの給料は3万円で、東大の教授よりも高かったので「そのままずっと働けばいい」という周りの声もありましたが、その気はまったくなかった。フランス政府の留学試験を受けてみたところ通った。ここから、ヨーロッパ留学という「外」への道が開けました。

フランス留学から 見えた 日本と フランスの姿

私のロールモデルでもあり研究対象でもある森鷗外や夏目漱石も留学をしています。いずれも一度だけです。

日本が貧しかった当時からすれば当然のことですが、私自身も生涯に一度しか留学はできないと思っていました。私が留学した頃のフランス政府は「帰りの旅費は出すが、行きは自弁しろ」という条件でした。旅費が船で24万円、飛行機代は25万円かかりました。これは父の給料の6カ月分ぐらいにはなってしまう。それで西洋に行くからには長くいようと決意しました。病気になるってたとえ死んでも帰らない。何かあったときでも、親に電話をかけるなんて夢にも考えていませんでした。

「外」との 往復運動で 培われる 相互理解

先に述べたように、あの頃はまだ留学生として何を研究すればよいかはつきりわかってはいませんでした。

で習っていた経験を活かし、教えられた通りに腕を90度に曲げて体を反らせて踊ったのです。ところが相手の女性から「あなたはなぜ体を突っ張っているんだ」とゲラゲラ笑われてしまいました。これだから東大の観念的な教育は駄目なのですね(笑)。

留学してまず気づいたのが、友達をいかにしてつくるかということ

とでした。その後、ドイツのボンに留学したのも、フランス時代に親しくしたドイツ人がボン大学の助手になったことがきっかけです。私の留学生生活を振り返ると、なにか不思議と友達がたくさんいて、それで辛い目を乗り切れたことが多かったように思います。「外」の人々との数々のやりとりには、日本の「あうんの呼吸」は通用せず、自身の伝えるべきものがなければ成立しません。それがあって初めて精神の往復運動が可能となり、お互いを分かりあえる。彼らとの出会いを通して学んだものは存外に大きかったです。

複数の 異文化体験が もたらした 「和魂洋才」の視点

パリからドイツへ向かい、当時の首都であるボンの駅に降り立つと、そこは「駅を間違えたのか？」と思うぐらい小さな町で驚きました。ドイツはヨーロッパの田舎の

からヨーロッパの文化の等高線の図のようなものが次第に出来上がった。ドイツはフランスに負けまいと一生懸命がんばりましたが、負けじ魂で「ドイツ魂」ということを言うようになります。また、今のイタリアは勢いを失っているような感じも受けますが、ルネサンスの頃はヨーロッパで一番文化の進んだ地域だったので、フランス人はイタリアに行くときみんな劣等感にかられて、そこでまた「フランス魂」と

フランスに到着し1週間後には通訳のアルバイトを始めますが、今思えば、この通訳のおかげで、日本のいろいろな階級の人と出会うことができ、そこから日本を再発見することにも、同時にフランスを発見することにもつながったのだと思います。

たとえば、日本側の代表団の通訳をした際、フランスの総評(労働組合)のようなところで働いている事務員に話を聞く機会がありましたが、なにか左翼思想がありそうなところで働いているのだろうと考えたのですが、そのフランス人は「契約で入った。思想とは関係ない」とはつきり言うのです。日本ではそういうことはまずないですし、総評の事務員であればみんな一緒にデモに行くようなイメージを持っていたので、これは面白いと感じました。

それから、日本の国鉄の代表団の通訳をしたこと。当時のフランスの国鉄の技術は世界一で、日本の「燕」が時速65キロで走っていたころ、フランスの「ミストラル」は130キロ出すことができました。運転室に乗車の際に、事故を起こしても一切補償は要求しないことを署名させられ、「これで衝突したらそれっきりだな」と思った記憶があります。あの頃は、日本とフランスとの経済格差が大き過ぎて、私自身は、日本が西洋に追いつけるはずはないと思っていました。「優れた西洋を学んで日本に持ち帰らなければ」と、さながら世俗的な宣教師のような感情も抱いていました。ですが、自著に記したように「洋魂洋才」といった西洋のものを過剰に良しとしたりする考えもなければ、逆に攘夷論や文化ナショナリズムに走るといような発想も、私にはなかった。

ですが、敗戦後の日本人留学生は少々ふがないと思うことはありましたね。パリ国際大都市というところでは、毎月ダンスパーティーが開かれていて、その収入が学生たちの自治活動の財源になっていました。この大学都市内には薩摩治郎八がつくった日本館がありましたが、そこでのダンスパーティーでは、日本人の学生は、萎縮してしまつて誰も踊らず、クロークで働いて僅かのお金を貰っている。私は、ここで日本の男が踊らないとはなんぞやと思ひ、東大のダンス研究会

「和魂」を どう捉え、 「外」と 向き合うか

いうことを言い出すようになりました。私はそれに気がついて「和魂伊才」の問題を研究し修士論文にまとめました。それは「ルネサンスの詩」として出版されています。そして、その後に博士論文として「和魂洋才」を研究し、『和魂洋才の系譜』を発表することになります。

『和魂洋才の系譜』は、主に森鷗外のケースを扱いましたが、単に鷗外の人と作品のみでなく、明治の時代、特に日露戦争前後の日本の知識人の精神状況を鳥瞰し、比較文化的見地から考察したものです。

です。日本には、徳川時代までの「和魂漢才」から、明治以降の西洋を取り込んだ「和魂洋才」への転換があります。グローバル化が進む現在の日本でも、自分たちは西洋人ではありませんから「洋魂洋才」は主張しにくいですし、だからといって「和魂洋才」を主張するにも今度は「和魂」についての自覚がなく、みなさん戸惑っているというのが現状です。

著書にも記しましたが、そもそも「和魂」すなわち「日本精神」の定義も、第二次世界大戦中に出版された『辭苑』には、「日本精神」の項にはたたくさんの説明があるのに対し、戦後の版の『広辞苑』では実質的な説明は何も加えられていません。それ以前の平安朝後期の「やまとだまし」と幕末以降の「和魂」とでは内実は変貌したにもかかわらず、「大和魂」を強調する形で用いられていたことを考えると、「和魂」を内容的に深く吟味することなく、他者との関係における自己把握として「和魂」を使っているだけに過ぎないのです。このような心理は、外地へ行った日本人が、外地にいるためにかえて日本を意識し、その知識がないにもかかわらず、日本文化や日本精神を強調したがるさまと似通っています。

今の日本人は徳川時代の日本人と同じとは言えず、だからといって西洋人でもなく、いわば文明の「混血児」のような一種の精神上の不安定感に悩み、そこから、日本の伝統文明への帰属感を確認すること

で自己同一性を保持しようとしたり、逆に西洋近代化の思想や文物をそのまま借用して自己変革を試みたりという、行きつ戻りつの運動が、日本国民のとくに知識層に見られました。また、知識人のなかには、極端な反日主義や極端な排外的日本主義を言うような人も出てくるなど、このような混沌と動揺のなかで、自分たちがいかなる文化史的状況に置かれているかを自覚的に把握することは、日本の将来の方向性を考えるうえで貴重な一助になるはずだと思います。『和魂洋才の系譜』を書いたのは東大の助手をしていた昭和39年から44年のことで、かなり昔になりますが、今もあまり状況は変わっていないようにも思います。それだから何度も出版されました。来年には『平川祐弘著作集』の第一巻として勉誠出版から出る予定です。

周辺国である日本が世界語である英語を学ぶ意味

日本という国は島国であり、海によって隔離されているため、外国文明に侵されるという不安感はありませんでした。「もの」を入れるだけで「人」は入れていなかったからです。そして外国から来た人は「もの」を教えに来た人でした。それだから日本人は文明というのは余所からくるものと捉えていました。言語においては、インド・ヨーロッパ語系の人々だけがいに文法構造が近いためお互いの言葉を理解しやすいですが、日本語は違う構造であり、それだけ日本人にとって外国語の習得は難しい。日本は、海と、この言語の壁が日本人を他から隔離し、その隔離をもしポジティブに評価すれば、保護してくれていたのです。自然条件によって日本人のアイデンティティが保たれていたとも言えます。

ですが、グローバルゼーションは不可逆的なものです。交通手段や通信手段が進歩するのは間違いない事実であり、それを逆行させることはできません。そうである以上日本人は英語を勉強しなければ、地球社会でマイノリティになってしまいます。日本語人口はかなり多いとはいえ、世界で日本語を話す国は一つしかないという意味では日本

語はマイナーランゲージですから、英語を能率良く勉強するしかないのですが、日本の教育の最大の間違いはすべての人に同じような教育を施そうとすることです。これではできる人は退屈してしまいます。カナダで行われているバイリンガル教育「トータルイマージョン」のような、いわゆるエリート教育を行うことも必要なのではないでしょうか。エリート教育が反対だというのであれば、せめて飛び級制度は認めるべきです。認めていないのは世界の大国で日本だけです。それで下に揃えるような平等を唱えても意味がありません。

日本文化の教養が国際社会におけるアイデンティティの拠りどころに

イオ・ハーンによるその英訳をあわせて教える。あるいは、アーサー・ウェイリーの英訳と照らしあわせて漢詩も『源氏物語』も読むことで、西洋語も東洋文化も同時に学べる教育法を普及させることが大切です。ちなみに、『源氏物語』は人間観察にも優れ、気品があり、言葉の使い方も洗練されている。日本史の授業ではわからない千年前の貴族社会を具体的に理解することができます。ダンテの『神曲』などにも親しむと西洋キリスト教文化の骨格が見えてきます。外国語の力をつけることが大事とは言っても、日本人としての教養を身につけなければ国際社会で日本人として自信をもつてふるまうことはできません。そういう意味で、古典は大変重要なアイデンティティの拠りどころになります。

などと偉そうに言っていますが、実は、私が『源氏物語』を読んだのも後になってから。前述したように特別科学組だったので古文は苦手でした。ですが、結局外国語と同じように頑張って勉強していると慣れるもので、習うより慣れるは意外と理に適っていると言えます。アーサー・ウェイリー自身も『源氏物語』は、英国から春休みにオーストリアへスキー旅行に行く汽車の中で読んだ。ヴィクトリアステーションから、どのようにドーバー海峡を渡り、パリでどう乗り換えたのかも覚えていないほど夢中になって読んだそうです。このように何かのきっかけでコツをつかむと、にわかにな面白くなるというのも、古典の素晴らしさなのかもしれません。ですから外国語を本当に身につけたいと思うのであれば、無目的な英会話にはなく、きちんとした古典を講読すべきです。実は、今も、私は読売カルチャー荻窪で『源氏物語』を、原文とウェイリーの英訳で教えていますが、紫式部はすばらしいし、ウェイリーも見事、その二つを扱える先生も良いから（笑）、人気があります。

自国と他国の複数の文化に足をおろし、世界に向き合う

人間の能力には限りがあり、異なる文化の2言語以上をマスターするのは難しいことはありませんが、19世紀末から20世紀初めにかけて、日本文化にも漢文化にも西洋文化にも深く足をおろすことが

できた知識人といえ、森鷗外や夏目漱石であったと思います。森鷗外は、明治・大正時代の、世界の中の日本の文化的将来について、パランスの取れた、今でも妥当と思えるような見方ができる人物でした。私が鷗外に関心を寄せているのは、専門分野における留学の成果というものではありません。主目的としていた医学を学びに渡欧した森林太郎が、ドイツ体験や西洋文学の読書を基に文学者鷗外になったという、多分留学当初は本人も考えが及んでいなかったはずのバイプロダクト（副産物）の部分です。文化史的に言うならば、そのような思いもかけない副次的結果のほうが、実は本来の医学学習よりもはるかに重要な意味をもちます。

鷗外は大正3（1914）年、大正時代の新青年たちに対して西洋文化の尊重すべきことを説くなかで「苟、自己を偉大にしようとする限りは、他の偉大を容るるに吝なるはずがない」（『生い立ちの記』序）と述べています。その鷗外が理想とした人は「二本足の学者」

『鼎軒先生』には「新しい日本は東洋の文化と西洋の文化が落ち合つて渦を巻いてゐる国である。そこで東洋の文化に立脚してゐる学者もある、西洋の文化に立脚してゐる学者もある。どちらも一本足で立つてゐる。一本足で立つてゐても、深く根を卸した大木のやうにその足に十分力が入つてゐて、推されても倒れないやうな人もある。……併しさう云う一本足の学者の意見は偏頗である。偏頗であるから、これを実際に施すとすると差支を生じる。……そこで時代は別に二本足の学者を要求する」。さらに「併し其苗は苗の儘である。存外生長しない。……そして世間では一本足同士が、相変らず葛藤を起したり、衝突し合つたりしてゐる」とも記されていますが、この指摘は百年後の現代にもますます真実味を帯びた提言となっていると思います。

あえてそこに付け加えるとすれば、二本足の人はさらに三本足の人となり「三点測量」ができるようになることが望まれます。自国文化に一本の足をおろし、さらに二本の足を外国の二点におろすことができれば、その人のコンパスは安定し、特定の一外国に傾倒するという一辺倒を回避することができます。ナチス・ドイツと手を組んだ陸軍のドイツ・スクールとか、北京に媚びたチャイナ・スクールとかは日本のためにならなかった。もっと三点測量のできる日本人がふえれば、地球社会の安定要素にもなり得るはずですよ。

森鷗外は、『生い立ちの記』序に「新たななる道徳、新たななる政治、新たななる宗教、新たななる文学に覚醒せんとし、自ら奮つて之を創造せんと欲するものは、先ず自己を深刻にすべきである」と記していますが、^{「新しさ」}の意味は、西洋文明との接触によって自己の内から新たに^{「洗練と湧きいでるもの」}の謂であり、それだから外国文明総体との出会いが日本人には意味をもつものと思います。

グローバル化という新たな波を、日本人はどう乗り越えるのか。今、その真意が試されています。しかしいくら為になる話をしても、聴き手が悪ければ役に立ちません。まさかあなたは私が言いませぬことをお書きになるのではないでしょうね（笑）。